

2022年度 個人研究実績・成果報告書

2023年 4月 25日

所属・職名	学長	氏名	原科幸彦	
研究課題	インパクト・アセスメント (IA) の理念と方法 ー日本のアセスメント制度のレビューを踏まえ			
研究キーワード	SDGs、インパクト・アセスメント、 環境アセスメント	当年度計画に 対する達成度	3.概ね順調に研究が進展し、一定の成 果を達成したが、一部に遅れ等が発生 した	
関連する SDGs項目	4. 質の高い教育をみん なに	11. 住み続けられるまち づくりを	12. つくる責任 つかう 責任	13. 気候変動に具体的な 対策を

1. 研究成果の概要

インパクト・アセスメント (IA) は、SDGs 達成のための意思決定を支援する重要な手段だが、日本では十分には認識されていない。一昨年度は SDGs の理念と IA の関係について、IA と SDGs の歴史的な展望も加え整理した。また、SDGs の概念と具体活動のあり方に関しては学長プロジェクト 1 期目 (2017～2021 年度) の成果をまとめた共著書『SDGs と大学』(2022 年 3 月 31 日発行)でも論じた。

SDGs の具体例として自然エネルギー100%大学の成果を 2022 年度も情報発信した、活動の報告を国内外で積極的に行った。2021 年 6 月に発足させた「自然エネルギー大学リーグ」には、2022 年度末までに新規に 10 大学が参加し、計 19 大学が参加することとなった。また、学長プロジェクト 2 に関しては、統合報告書への展開や IA との関連を学会で議論した。

IA は EBPM (Evidence Based Policy Making) の手段として重要な仕組みだが、日本のアセスメント制度にはこの観点が欠落している。例えば、神宮外苑再開発計画における環境アセスメントは多くの問題をはらんでいる。この点に関し、『環境と公害』誌の第 52 巻第 3 号で、「神宮外苑再開発計画」の特集を組み、筆者も論文を執筆し、2023 年 1 月 25 日号で発表した。東京都の環境アセスが 2019 年以来行われ、2023 年 1 月 30 日のアセス審議会総会で手続き上は終了した形になったが、その直前にイコモス日本委員会から当アセスの評価書には多くの虚偽報告があると指摘され、審議会も対応に苦慮している。日本の環境アセスメントに関しては、2023 年が環境基本法成立から 30 周年になることから、『環境と公害』誌で特集号が生まれ、その号に掲載すべく日本の環境アセスメントの今後についてまとめ投稿した。同誌への掲載は 2023 年 4 月となる。

2. 著書・論文・学会発表等 (査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載)

【著書・論文 (査読なし)】

原科幸彦 (2022) 「学会設立の理念は多様性と国際性 - 環境アセスメント学会と IAIA -」、『環境アセスメント学会 20 周年記念誌』、2022.6.

原科幸彦 (2022) 「高等教育機関における気候変動アクションー自然エネルギー100%大学の連携ー」、『グローバル共生』、第 2 号、pp. 10-19. 2023.2.27.

原科幸彦 (2022) 「特集にあたって - 神宮外苑再開発計画 -」、『環境と公害』、52(3)、p. 47, 2023, 1. 25

原科幸彦 (2022) 「神宮外苑の環境はアセスメントで守られるか - 日本の制度の効果と限界 -」 『環境と公害』、52(3)、pp. 66-71. 2023, 1. 25

【学会発表等】

(口頭発表、講演)

Harashina, S. (2022) Promoting SDGs and Climate Action from Universities, *Keynote Speech*, at the session "Renewable Energy University League and Universities' Initiatives on Environmental Issues" the PRSCO2022 (27th Pacific Conference of the Regional Science Association International 2022 in Kyoto), August 3, 2022, Virtual

原科幸彦 (2022) 「神宮外苑再開発計画の持続可能性アセスメント」、環境アセスメント学会 2022 年度大会、2022.9.3、ハイブリッド (オンライン発表)

原科幸彦 (2022) 「神宮外苑再開発をめぐる 環境アセスの課題」日本建築学会脱炭素社会 WG・脱炭素社会推進会議都市・複合災害 TF 合同公開研究会、2022.11.27、オンライン

Harashina, S. (2022) CUC, As the First RE100 University in Japan -Beginning from voluntary activities-, YEA! Global Summit 2022, July 3, 2022, Virtual

原科幸彦 (2022) 「自然エネルギー100%大学 - 隗より始める脱炭素社会-」、EAUC/JCI ウェビナー、2022.5.4、オンライン

原科幸彦 (2022) 「自然エネルギー100%大学 - カーボンニュートラルをどう実現するか-」、愛知県私立大学協会臨時理事総会講演、2022.11.28、オンライン

原科幸彦 (2023) 「自然エネルギー100%大学とその展開 - 脱炭素化へ大学の貢献-」、国立情報学研究所・NII サイバーシンポジウム、2023.1.13、オンライン

(パネリスト、コメンテーターなど)

原科幸彦 (2022) 大会シンポジウム「ESG 投資の広がり不動産投資」(パネリスト)、日本不動産学会・資産評価政策学会 2022 年度秋季全国大会シンポジウム、明海大学、千葉、2022.12.10、ハイブリッド、(報告掲載は、『日本不動産学会誌』、36(4) 通巻第 143 号、pp.25-43, 2023.3.30)

原科幸彦 (2022) 座談会、「グローバルな視点からの環境影響評価制度の再検討」(パネリスト) 環境アセスメント学会創立 20 周年記念第 2 回座談会、日本大学理工学部 (東京)、2022.12.14

原科幸彦 (2022) テレビ放送、「神宮外苑はどう変わる? - 再開発と都市の緑、都民の本音は -」(コメンテーター) NHK 総合テレビ「首都圏情報ネタドリ」、2022.5.20 放送

原科幸彦 (2023) 講演会对談、「迫る気候変動の危機 - 市川市のカーボンニュートラルの実現に向けて、行政・企業・教育機関・市民それぞれにできること -」(講師・平田仁子氏との対談)、地球温暖化防止特別講演会&特別対談、市川市地球温暖化対策推進協議会、行徳文化ホール I&I (市川)、2023.2.25

3. 主な経費

国内諸学会でのセッションの企画運営及び発表、論文執筆等の作業に消耗品費や資料収集費を使用した。コロナ禍のもと、多くはオンラインで開催された。国際学会は Regional Science Association International、国内学会は日本不動産学会、環境アセスメント学会などである。

4. その他の特筆すべき事項 (表彰、研究資金の受入状況等)

自然エネルギー100%大学の活動は、EAUC 主催、UNEP 協賛の、世界の大学を対象とする国際賞 Green Gown Awards に 2022 年から新設された 2030 Climate Action 部門の初代受賞者となった。

また、昨年度報告し損ねた受賞がある。本学の「自然エネルギー100%大学達成計画」は、日本計画行政学会の第 19 回計画賞の特別賞を授与された (2022.2.25)。

(本文は2ページ以内にまとめること)